

家族経営で搾乳ロボットによる省力化を実現 ～父の酪農を引き継ぎながら父と違う酪農を～

新城市 森 富士樹さん
酪農

【平成 29 年 4 月 21 日掲載】

新城市作手地域にて、パソコンを活用した牛の個体管理、搾乳ロボットの導入などにより省力化を実現している有限会社大東牧場の森 富士樹さんをご紹介します。

就農を中学 2 年生で決意

新城市作手は標高 550m の中山間にあり、冷涼な気候を利用して酪農や肉牛生産が盛んな地域です。ものごころついたときから酪農が身近にあり、牛を育てることが大好きな父富夫さんの背中を見て育った森さんは、中学 2 年生のときの作文「牛飼いの父」で、将来はお父さんの仕事を継ぎたいと書いたそうです。その意思を受けた両親は、森さんの就農を想定して計画的に設備投資を行い、当時国内では取組事例が少なかった、フリーストール・ミルクパーラー方式（牛が牛舎内を自由に動き、搾乳専用施設で生乳を搾る方式）を取り入れました。

森さんは、安城農林高校、帯広畜産大学と進学し、大学卒業後は、大学の実習先だった北海道の酪農家で 1 年間、さらにその農家の紹介でドイツの酪農家で 1 年間研修をしました。北海道の酪農家では個体管理や人工授精を学び、ドイツでは、搾乳ロボットを導入して、家族経営でも効率よく、牛にも地域環境にも配慮した先進的な酪農を学びました。そして、帰国後すぐの平成 14 年に就農しました。



森 富士樹さん



フリーストール牛舎で好きな場所から頭部を出して餌を食べる様子

搾乳ロボットの導入と度重なる危機

留学など外の世界を見た森さんは、父の酪農家としての優秀さを改めて感じました。牛を育てる技術も経営も卓越していることを実感し、では自分に何ができるのだろうと常に考えました。

そこで、就農してすぐ、パソコンを活用した牛の個体管理を始め、繁殖や給餌計画に反映させました。次に着手したのは、搾乳作業の省力化でした。搾乳は、酪農において最も時間がかかり、一日 2 回以上必要で、売上げに直結する作業です。平成 16 年頃から搾乳ロボットの導入を検討し、平成 19 年に導入しました。搾乳ロボットは、搾乳室に入室してきた牛を機械で搾乳するものです。導入のため、フリーストール牛舎と搾乳室を区切る壁や搾乳室に誘導する通路の設置など、工事にしばらく時間がかかり、騒音等のストレスが牛に影響して乳量が減りました。これは想定内だったものの、そのあとしばらくしてもなかなか乳量が戻りませんでした。

さらに追い討ちをかけるように、平成 24 年 5 月に漏電事故が起きました。当時飼育していた経産牛 120 頭のうち、20 頭もの牛が死亡し、生き残った牛たちも乳量が激減しました。不可抗力の事故ではありましたが、このとき森さんは、何としても経営を立て直したいと強く感じました。

搾乳ロボットに合わせた飼養管理が必要だった

経営再建への一歩として、基本技術を見直しました。見直しの中で重視した技術の一つが、給餌するエサのうちの濃厚飼料の給与方法でした。分娩後は産乳量に対しエサの食いが少ないため、エネルギー不足の状態となりますが、濃厚飼料を急激に増やすと病気になる可能性があるため、通常、濃厚飼料の給与量を 2, 3 か月かけて徐々に上げていきます。しかし森さんは、一律な給餌ではなく、パソコンを活用して個体の状況や乳量を見ながら、分娩後早い時期に濃厚飼料を最大量与える指標を採用しました。この指標に沿って給与するため、1 回の最大給与量や給与間隔も見直し、濃厚飼料を細分して与えました。その他にも様々な改善に取り組んだ結果、搾乳ロボット導入から 8 年目の平成 27 年に、ついに搾乳ロボット導入前の乳量に達しました。

今振り返ると、「導入前の管理に戻すのではなく、搾乳ロボットに合わせた管理が必要だったのだと思う」と話してくれました。



左：フィードステーション(右の牛は濃厚飼料を食べている)
右：搾乳ロボット(牛がロボット内に入り搾乳中)

早期の経営移譲、父から引き継いだ酪農をさらに継承していく

主力で仕事をするようになった森さんは、先輩酪農家からの勧めで経営移譲を考えるようになりました。父に話したところ、所属している組合の役員の任期が終わる時期で、父も経営移譲のタイミングだと感じていたそうです。平成 26 年 7 月に経営移譲し、会社の代表となったことで、経営意欲と責任感がさらに高まりました。

また、森さんはこれまでの取組をまとめ、全国酪農青年女性会議酪農発表大会にて発表し、酪農経営発表の部で審査委員長特別賞を受賞しました。父とは違う酪農を目指して歩んできた自分の経営を振り返る機会となるとともに、地元の関係者や同業者からも改めて評価を得ました。

最後に夢をうかがったところ、「10 年後を目処に搾乳ロボットをもう一台入れたい。夢というよりは、見通しが立ってきたので、実現したい。」と力強く話してくれました。息子さんに継承の意思があるという話も出ており、「酪農家は厳しいから親としては継いでほしくないけど、息子が継ぐ可能性も考えていかなきゃね。」と、森さん自身もまた牧場を引き継いでもらう覚悟をしている様子でした。



現在の牛舎(右側の建物に搾乳ロボットが入っている)

執筆：農業経営課

取材協力：新城設楽農林水産事務所農業改良普及課